

# 民俗学の研究方法としての権威的知識理論

クリスチャン ゲーラット

## 1 権威的知識理論の由来

本研究ノートでは、文化人類学者ブリジット・ジョーダンの権威的知識理論を紹介し、その日本民俗学での利用可能性について明治維新以降の出産習慣を例として考察したい。

ジョーダンは権威的知識というコンセプトを、社会または共同体における知識の構築と価値付けの分析を目指して構築した。その背景には60年代後半の第二波フェミニズム以降の医学的出産管理への不満の高まりがあった。すなわち、産婦が自分自身の経験から疎外されているという意識が目立つようになり、また、医学化された出産がもたらす健康・精神的な障害が問題視されつつあった。産婦たち自身がこうした医学的出産管理への抵抗を示す運動もこの時代に誕生したのである<sup>(1)</sup>。

最初は、その運動は「ドクターバッシング」に過ぎなかったが<sup>(2)</sup>、徐々に文化人類学者の関心も引くようになった。ジョーダンは70年代から妊娠・出産を人類学の立場から捉える論文を発表し<sup>(3)</sup>、1978年にアメリカ・スウェーデン・オランダ・ユカタンでの出産習慣を比較する *Birth in Four Cultures* という画期的な著作を著した<sup>(4)</sup>。その目標は、その国の習慣を記述するだけでなく、だれが出産管理責任を取るか、どの知識が支配権を得るか、どの知識が蔑視されるかを分析する点にあった。権威的知識概念は1978年の初版に初めて登場したが、本格的に理論化されたのは、2001年に出版された日本語版の基礎ともなった1994年の第4版においてであった。

## 2 権威的知識の定義

ジョーダンが Birth in Four Cultures の第 4 版において、権威的知識を以下のように定義した。

中心にある観察は、特定のどんな領域でも複数の知識体系が存在し、その中のあるものが、それが世界の状態を当面の目的のためにはよりよく説明するという理由で（“ 効率 ”）、あるいはそれがより強力な権力基盤と結びついている（“ 構造上の優位 ”）ゆえに他の知識体系よりも重みを得るに至る、ということである。ときには同等程度に正統的な複数の知識体系があり、人々はその間を気楽に行き来し、特定の目的に応じてそれらを順番に使ったり、同時に使ったりする。しかし多くの場合、1 種類の知識が支配権を得る。ある 1 つの知り方を権威的知識として正統化することは、他のすべての知り方から価値を奪い、しばしば完全にそれらを捨て去ってしまうことである。他の知識システムを信奉している者は、後ろ向きで無知な、あるいはナイーブなトラブルメーカーとして見られるようになる。（中略）権威的知識の構築とは、実践共同体内の権力関係を作り上げ、同時にそれを反映している止むことない社会的過程である。それが起こるのは、すべての参加者が現在の社会秩序を自然なものとして、つまり物事が（明らかに）そうになっているあり方として、見るようになることによる<sup>(5)</sup>。

ジョーダンの定義のいくつかの要素は、それ以降の研究で見落とされる傾向がある。その一つは、権威的知識の構築性である。すなわち、どんな知識がある時点で正統として見なされるかは、その知識の内容や事実性とは関係がない。権威的知識理論においては、事実性は「世界の状態を当面の目的のためにはよりよく説明する」機能とは相違していないとジョーダンはいう。首尾一貫した、あるいは社会の一員の経験と矛盾が発生しない知識さえあれ

ば、その知識が権威的知識になる可能性がある。しかし、社会の一員の経験との矛盾が発生する場合には、知識制度の権威が失われる。そのプロセスの一例がカサリーン・キングフィッシャーとアン・ミラードの *Milk Makes Me Sick but My Body Needs It: Conflict and Contradiction in the Establishment of Authoritative Knowledge* において示されている<sup>(6)</sup>。そこで課題とされたのは、乳糖不耐症で難儀する妊婦が、医者から牛乳を飲むように指示を受けた際の反応である。また、C・H・ブラウナーとナンシー・ブレスの *The Production of Authoritative Knowledge in American Prenatal Care* は、栄養士が妊婦に与えた指示を例として、自身の経験と正統的知識の差異が顕在化した際の妊婦の反応を分類し、彼女たちがどの指示に従うか、どの指示を受け付けないかを考察したものである<sup>(7)</sup>。

もう一つは権威的知識の構造上の優位が過大に見積られる傾向である。この点は、力関係の分析を重んじるフェミニズムをルーツとするものであり、驚くべきものではない。しかし、権威的知識というコンセプトの分析力が、その過大評価によって弱められる可能性もある。既存の研究を検討する限り、多様な知識がぶつかり合い本来極めて複雑であるはずの権威的知識の構築過程が、単なる医学知識と妊産婦の本能的知識の間の葛藤として二項対立的に簡略化される傾向にあるように見受けられる。そのような簡略化は、妊産婦の個人的経験の多様性とも符合しないし、医学が無矛盾的・画一的なものではない事実とも符合しない。たしかに、医学は多様な学説または学派が存在し<sup>(8)</sup>、知識の構築は継続的過程の中にある。無数の医者、薬剤師、医学技術士などを包含する医学のコミュニティーでは、先端的で高度なレベルではコンセンサスが構築されていない場合も多く、正統知識が存在する可能性は基礎レベルに限られているといえるかもしれない。このような問題から、文化人類学者は医学コミュニティの上部構造を扱わず、個人レベル（例えば、ある女性のある病院での経験）だけに集中するアプローチが多い。

いずれにせよ、権威的知識は硬直的な体系ではなく、継続的過程の中で生ずる、流動的な性格のものである。

### 3 権威的知識理論の文化人類学への影響

#### 西洋の場合

ジョーダンの権威的知識理論は、文化人類学、特に妊娠と出産を対象とする研究領域に大きな影響を与えた。こうした影響を受けて、二つの大きなケースが論じられるようになる。伝統的知識と近代医学知識の間の葛藤がまだ継続してる開発途上国での状況、あるいは医学出産管理への不満が特徴である先進諸国の状況である。ジョーダンの影響を受けた論文は数多く発表されたが、ここではとくに重視すべき二つの論文集を紹介しておくに留める。一つはロビー・デービスフロイドとカロリン・サージェントが編集した *Childbirth and Authoritative Knowledge: Cross-Cultural Perspectives* で、もう一つは *Medical Anthropology Quarterly* という雑誌の別冊である、*The Social Production of Authoritative Knowledge in Pregnancy and Childbirth* である<sup>(9)</sup>。上記二冊は収録論文に重複もあるが、両者ともにジョーダンの権威的知識理論を踏まえた様々な立場からの研究が整理されており、この種の問題の研究史を理解する上で基礎的な文献といえることができる。

#### 日本の場合

日本の学界では、ジョーダンの権威的知識理論は、2001年に出版された宮崎清孝と滝沢美津子らの『*Birth in Four Cultures*』(邦題『助産の文化人類学』)の翻訳によって、紹介された。しかし、人類学において、権威的知識を分析方法として用いる研究は今でも珍しいと言える。もっとも、ジョーダンの理論を踏まえる非常に興味深い研究も発表されている。西洋における権威的知識理論を踏まえる研究は殆ど妊娠と出産に関するものに限られているが、飯田敦子は「伝統医療の復興とタイ・マッサージの普及 北タイにおける村民の対応」において、妊娠・出産という分野を越えた議論を展開している。すなわち、飯田は、近年のタイ政府が、タイ・マッサージを「タイ式医療」の分野に含めて全国に普及させようとする動きと、そのような伝統医療

復興運動がタイ北部の僻地に起こす軋轢とを研究対象とする。飯田は、その文脈で権威的知識の構築過程を分析しながら、ジョーダンの理論の利用可能性が一つの分野に限られていないことを示した。

また、従来の妊娠・出産論の文脈でも、磯部美里が「中国における西双版纳タイ族の男性産婆：出産と伝統医療との関わり」の中で、中国政府の伝統的助産制度の近代化運動に対するタイ族の反応を扱っている。

以上、日本におけるジョーダンの理論を受容したアプローチを紹介したが、いずれも文化人類学または民族学に属した研究であり、日本では、民俗学の分野でジョーダンの理論を用いたアプローチは試みられていないようである。以下では、権威的知識理論の民俗学的データの分析方法としての可能性を考察したい。

#### 4 民俗学における権威的知識理論の可能性

民俗学は、これまで、近代以降の妊娠・出産の構造の変化を精緻に調査・研究してきた。筆者には、これ以上、それらのデータに新たなものを加えることはできない。しかし、その過程における知識の構築と知識の評価の変化については、未解決の問題が残っていると思われる。

まず、近代以降の妊娠・出産をめぐる歴史に、権威的知識の構築過程の発展を指標とする時代区分を設ける必要がある。さしあたり、地域社会ごとの多様性があつた明治維新までの時代、明治維新以降の新産婆制度の実施から第二次世界大戦までの時代、出産管理が医学化される戦後時代、90年代半ば以降の情報化社会の時代という区分を仮に設けておく。明治維新以前の地域社会における妊娠・出産に関する知識の特徴は、知識の「一致」であると言えるであろう。医学的知識、経験知識、宗教的知識の間の画然たる区別がなく、また、共同体の伝統的知識は競争がなかったため、それらの知識は勿論権威的であった。明治維新以降は、政府が近代化運動を行った。それらの出産の近代化は、資格を持っている新産婆が担っていった。その過程で、宗教的知識と経験知識の役割は段々減少していったが、医学的知識を得た医師の

役割は難産の際など緊急時に限られていた。そうした状況も戦後に大きく変わっていく。病院出産の普及に伴い、医者 of 科学的知識とその役割が産婆のそれに比べて段々支配権を得ていった。しかし、他の先進国と比べてみると、日本の産婆の役割は比較的強かったといえる。そして、90年代半ば以降は、日本社会の情報化が進んで、人々の重要な情報源であるインターネットが普及した。これにより、妊娠・出産に関する状況が新たな局面を迎えている。

## 5 維新政府の産婆規則

以上の時代区分を踏まえて、ここでは権威的知識理論の実践の一例として、明治維新以降の知識の構造の変化に言及したい。江戸時代にも、幕府が出産習慣に影響を与えようとしたことはあったが、結局、出産をめぐる知識は地域社会において構築されるものであった。このころの権威的知識は、トリアゲバアサンの経験的知識、妊婦の身体的知識、共同体の宗教的知識または疑似宗教的知識であった。ジョーダンの言葉を使えば、その知識は世界の状態をよりよく説明しているために「効率」的であり、地域社会がこうした知識を共有しているという「構造上の優位」を保っていた。

維新政府が作った法的環境はその地域社会の構造に相対するものであった。1868年に墮胎と間引きを規制しようとして、それまで家と村社会が持っていた出産管理権を国家の下に置いた。1874年の「医制」で、医学的知識と産婆の経験知識との葛藤が本格的に始まる。産婆に、年齢や健康などに関する条件が付けられる。それに、産婆が免許を得るためには、医者の目の前で10人の平産と2人の難産を指導しなければならないことになった。このように、産婆の経験的知識が医者の医学的知識に従属するものとして位置付けられることになる。

1899年の「産婆規則」はより影響力の強いものであった。産婆は訓練を受け、試験に合格しなければならないようになり、それに産婆記録が実施された。マックス・ヴェーバーの、支配を合法的支配、伝統的支配、カリスマ的支配の三種にわけると、支配理論の立場から見れば、トリアゲバアサンの伝統

的・カリスマ的権威知識に新産婆の合法的権威が対置される<sup>(10)</sup>。しかし、その合法的権威は必ずしも知識に基づくものに限られていなかった。また、新産婆には、出産を経験したことがなく、産婆の訓練を出世の機会として目指した若い女性もいたので、トリアゲバアサンのような経験知識も持っていなかった<sup>(11)</sup>。他方、訓練で身につけた医学的知識は本当の医者との訓練とは比べるべくもないものであったし、医療器具を使ったり、投薬したりする権利は医者に限られていた。

こうして妊娠・出産に関する知識と権威が、伝統的村社会、医学界、その中間の存在であった新産婆に分けられることになった。このような区別は、明治時代における権威構築過程の起点であった。この点に関しては、藤目ゆき、宮坂靖子、落合恵美子、西川麦子などが発表した新産婆のライフストーリーが参考になる。新産婆の活動の特徴の一つは、地域社会の構造に基づいた伝統的出産習慣とその担い手となったトリアゲバアサンとの継続的葛藤であった。新産婆はそうした葛藤の中で政府とその法律制度から支持を得たが、彼女たちが構造上の優位を占めていた伝統的知識に対して徐々に優勢に立つことが出来たのは政府からの支持だけが原因ではない。むしろ、新産婆の知識の方がより効率的であって、彼女たちは医師の権能を持っていなかったが、それでも修養のできた女性としてのカリスマ性を持っていたからであった。

ちなみに、新産婆の法律制度や政府との関係は複雑であったものの、新産婆は近代化運動の地方での担い手になる希望があった。他方、法的環境は地域社会の女性たちに様々な戸惑いをもたらした。産児制限問題はその例の一つである。そのような場合には、政府の合法的権威と新産婆の経験的知識との軋轢があった。政治的運動員になった産婆の柴原浦子のケースはその一例と言えるかもしれない<sup>(12)</sup>。明治維新以降の社会的構築過程で生成した、妊産婦と医学界の中間にある存在としての新産婆の特別の役割は、現代でも日本出産習慣の特徴の一つである。いずれにせよ、その過程は非常に複雑で、今日でも継続しているものと考えることができる。そのような状況の分析に対して、ジョーダンの権威的知識理論の有効性を本稿では指摘した。

## 注

- (1) 松岡 1988、杉立 2002
- (2) MacCormack 1996
- (3) 文献目録: [http://www.lifescapes.org/comprehensive\\_bibliography.htm](http://www.lifescapes.org/comprehensive_bibliography.htm)
- (4) Jordan 1987
- (5) ジョーダン 2001
- (6) Kingfisher/Millard 1998
- (7) Browner/Press 1996
- (8) 藤崎和彦 1995
- (9) 1996年10号2巻
- (10) Weber 1985
- (11) 落合恵美子 1990
- (12) 藤目ゆき 1993

## 参考文献

Browner, C. H., and Nancy Press

1996 "The Production of Authoritative Knowledge in American Prenatal Care." *Medical Anthropology Quarterly*, New Series 10(2) (June): 141-156.

Davis-Floyd, Robbie, and Elizabeth Davis

1996 "Intuition as Authoritative Knowledge in Midwifery and Homebirth." *Medical Anthropology Quarterly*, New Series 10(2) (June): 237-269.

Davis-Floyd, Robbie E., and Carolyn Fishel Sargent, eds.

1997 *Childbirth and Authoritative Knowledge: Cross-Cultural Perspectives*. Berkeley: University of California Press.

Fiedler, Deborah Cordero

1996 "Authoritative Knowledge and Birth Territories in Contemporary Japan." *Medical Anthropology Quarterly*, New Series 10(2) (June): 195-212.

藤目ゆき

1993 「ある産婆の軌跡 柴原浦子と産児調節」『日本史研究』365

藤崎和彦

1995 「医師」黒田浩一郎編『現代医療の社会学 日本の現状と課題』世界思想社

藤田真一

1988 『お産革命』朝日新聞社

飯田淳子

- 2006 「伝統医療の復興とタイ・マッサージの普及 北タイにおける村民の対応」『東南アジア研究』44(1)

磯部美里

- 2010 「中国における西双版纳タイ族の男性産婆 出産と伝統医療との関わり」『Multicultural Studies』10

Hays, Bethany M.

- 1996 "Authority and Authoritative Knowledge in American Birth." *Medical Anthropology Quarterly, New Series* 10(2) (June): 291-294.

ブリジット、ジョーダン

- 2001 『助産の文化人類学』宮崎清孝、滝沢美津子訳 日本看護協会出版会

Jordan, Brigitte

- 1993 *Birth in Four Cultures: A Crosscultural Investigation of Childbirth in Yucatan, Holland, Sweden, and the United States*. 4th ed. Prospect Heights: Waveland Press

鎌田久子他編

- 1990 『日本人の子産み・子育て』勁草書房

MacCormack, Carol

- 1996 "Review of: Brigitte Jordan (ed.): *Birth in Four Cultures: A Cross-Cultural Investigation of Childbirth in Yucatan, Holland, Sweden, and the United States*." *Medical Anthropology Quarterly, New Series* 10(1): 96-98.

松岡悦子

- 1988 『出産の文化人類学 儀礼と産婆』海鳴社  
2003 「妊娠・出産 いま・むかし」新谷尚紀他編 『暮らしの中の民俗学3 一生』吉川弘文館

宮坂靖子

- 1989 「或る産婆の生活史 結婚、子育て、働くこと」『人間文化研究年報』13

西川麦子

- 1997 『ある近代産婆の物語 能登・竹島みの語りより』桂書房

落合恵美子

- 1990 「聞書・産婆と産科医二代のライフヒストリー 京都と尾鷲における出産の変容」『総合文化研究所紀要』7

大出春江

- 2006 「出産の戦後史」新谷尚紀、岩本通弥編 『都市の暮らしの民俗学3 都市の生活リズム』吉川弘文館

Steger, Brigitte

1994 From Impurity to Hygiene: The Role of Midwives in the Modernisation of Japan." *Japan Forum* 6(2): 175-188.

1997 Der Wandel der Geburtshilfe vom unreinen Gewerbe zum Karriereberuf oder: Die Dissemination staatlicher Kontrolle ins Private." In *Getrennte Welten, gemeinsame Moderne? Geschlechterverhältnisse in Japan*, ed. Ilse Lenz and Michiko Mae, 150-179. Opladen: Leske und Budrich.

杉立義一

2002 『お産の歴史 縄文時代から現代まで』 集英社

Weber, Max

1985 Die drei reinen Typen der legitimen Herrschaft." In *Max Weber: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, ed. Johannes Winckelmann, 475-488. Tübingen: Mohr.